

第1回（8月）会議録（主な意見）

講義「社会に開かれた教育課程の実現に向けて ～県立高校でのコミュニティ・スクールの実践から～」

（講義内容）

実践的な取り組み

●探究活動

- ・総合的な探究の時間を7単位で設置
- ・地域フィールドワークを通じて課題発見・解決を学ぶ。
- ・地域講座（防災、福祉、商品開発など）を実施し、生徒の興味関心に応じて探究テーマを設定。

●地域連携

- ・地元企業・団体と連携し、農産物の輸出、学校紹介パンフレット制作などを実施。
- ・地域課題（買い物難民、観光振興など）に対する生徒の提案活動。
- ・中学校との連携授業やメンター活動を通じて、学びの循環を促進。

生徒の変化と成果

- ・地域の大人との関わりにより、自己肯定感が向上。
- ・内気な生徒が中学生の前で堂々と発表できるようになるなど、成長が顕著。
- ・探究活動を通じて、社会課題への関心と行動力が育まれる。
- ・地域との連携が生徒の視野拡大と価値観の多様化に寄与。

組織体制と運営

- ・学校運営協議会（CS）は最大15名で構成（PTA、大学、地域代表など）。
- ・分科会を設置（地域連携、評価検証、魅力化発信、生徒育成）、課題に応じた対応を実施。
- ・地域学校協働活動推進員を4名配置し、授業支援や専門家紹介を担当。

地域との関係性の捉え方

●コミュニティ型：地域密着型の活動

→主に、小・中学校で展開されているように、地域の教育資源（ヒト・モノ・コト）を学校の教育活動に活かす。主に地域の人材を委員に選任し、地域コーディネーターを選任して展開していく。

●テーマ型：学校の特色や課題に応じた活動（例：進学、ICT、地域課題）

→学校の教育課題による。その学校のスクールミッションを実現するための課題を解決するためのコミュニティ・スクール。委員の選任には企業や関係行政機関、高等教育機関等々の関係者となる。

（委員からの主な意見）

- ・生徒1人に対して祖父母と両親のあわせて6人が人材バンクになり得る。
- ・学校に関わったことのない人でも、生徒と話すことで見守る目になる。
- ・高校生が地域を広く捉えることが、地域のウェルビーイングに繋がる。

- 津幡町ではCSが未導入であり、笛吹高校の実践に感銘を受けた。
 - 高校生が中学生のメンターとなり「もっと勉強しなきゃ」と感じた点に感動。
 - 学校と地域が「双方にとって幸福になる関係」が重要。
 - CS導入に向けたガイドブックの必要性を提案。
-
- 40年前の地域連携活動の経験を振り返り、現在との違いを指摘。
 - 地域の組織（青年部・婦人部・町会・PTAなど）の衰退を懸念。
 - 地域が元気になる仕組みをCS活動に組み込むべきと提案。
 - 財源確保の難しさを指摘し、CS活動の資金源について質問。
-
- 小中学校のCS委員を務めており、概念の周知不足を指摘。
 - 高校のCS活動は未知の領域であり、笛吹高校の事例に感心。
 - 「コミュニティ型」と「テーマ型」の分類が明確で参考になると評価。
 - 地域との繋がりが教育の本質であると強調。
-
- 高校のCS活動に夢を感じ、コミュニティ型とテーマ型の分類に納得。
 - 地域の祭りに向けた学校・地域連携の実例を紹介。
 - 地域住民が学校活動に関わることで元気になり、学校の支援にも繋がる。
 - 地域の人材活用が学校教育の補完になると提案。
-
- 高校生が中学生に教えることで、学びが深まる点を高く評価。
 - 地域の伝統芸能（太鼓・獅子舞など）を高校に紹介する活動を提案。
 - 地域文化の継承と学校教育の連携の可能性を示唆。